読売俳壇

矢島　渚男　選

あてどとは流れゆく先春の雲　浜松市　久野　茂樹

【評】今は旅行に行くときには綿密な予定を立てるが、かつては「あてど」ない旅もあった。そんな旅がしたいもの。いい句だ。

新しき地図へ画鋲のあたたかし　雲南市　熱田　俊月

【評】小学校の壁かな。画鋲で貼る、先生かな。でも、今は世界地図に新しくなって欲しくないものだ。「新品」の意味として採る。

義士祭俳号もちし義士もあり　横浜市　吉野　暢

【評】東京芝の泉岳寺で四月初め、赤穂義士祭が行われる。大高源吾は子葉の号で、他にも何人かいて、大石内蔵助も可笑の号で句を残したとする説さえある。

干し竿と巣箱をおいて転居せり　栃木県　あらゐひとし

輝の手を労りあひし友も寡婦　和歌山県　平尾　晴美

スイッチを強に一日春炬燵　寒河江市　大谷　正行

派出所が交番となる水仙花　京都市　滝村　実

引っ越しや荷台に回る風車　仙台市　鎌田　魁

望郷の水平線や春かすむ　ソウル　平井たけし

方言の待合室や日の永き　倉敷市　中路　修平

高野ムツオ　選

うららかやいま揺れるともしれぬ国　東京都　伊藤　直司

【評】「揺れる」は地震のことだろうが、政治など、他の不穏な揺れも連想させる。しかし、穏やかな春日和、その危うさもまた楽しもうとのひねくれぶりに俳諧味が横溢。

早蕨のこの山さへもかつて海　京都市　足立　紀子

【評】日本列島はかつて大陸の一部。プレート移動によって海が陸となり、陸が海となった。その大自然の不思議が春の蕨の恵みをもたらした。

春愁の燃え残りたる一斗缶　豊中市　葉村　直

【評】焚き火用の一斗缶だろう。かつて工事現場などでよく見かけた。木屑や紙屑はよく燃えた。しかし、春愁はますます深まったようだ。

芝焼のバーナーの火の平和なり　川崎市　加藤　英行

麦を踏む地震の痕ある故郷の　小山市　松本　喜雄

白鷺の首や春田を一歩一歩　会津若松市　安藤　和繁

春風やどこでもドアの開きしまま　佐野市　山崎　圭子

パンジーのおそろいの顔笑ってる　千葉市　福岡　初代

蛙啼く今が修羅にて候へば　倉敷市　谷吉　修一

銭湯のペンキ絵不動春一番　埼玉県　竹本　遊児

正木ゆう子　選

水汲みに精一杯や木の根明く　柏崎市　桜井　真則

【評】被災して三か月が過ぎてもまだ水道が使えない。水は重く、毎日のことなので、どんなに大変な生活か。「木の周りの雪が溶ける」という、季語の明るさに僅かな救いがある。

遠慮なく追ひ抜きなされ鳥雲に　下田市　森本　幸平

【評】後ろから来た人に向けた言葉だろうが、季語の働きで、老鳥が後続の鳥に言っているようでもある。鳥は先輩を追い抜いたりしないかも。

3・11祈り祈り祈り　幸手市　北川　護

【評】五七五でも十七音でもないが、素通りはできない句。このようにしか書けない時は、俳句らしくならなくても、このように書くのが正解。

根に小石噛みて薺の花咲きぬ　旭市　斉藤　功

地べたすぐそこ春風の車椅子　福岡県　松養　花子

ていねいに小粒も食べて蜆汁　鳥取県　表　いさお

退院の母の食べたきものに独活　熊谷市　間中　昭

蜂蜜の固き一匙春の風邪　上野原市　宮野　始

春耕やひと鍬ごとに風入れて　三木市　阿南不二枝

二度と駆けぬグランド駆けて卒業す　上尾市　中野　博夫

小澤　實　選

受験子や深夜のシャドーボクシング　東京都　天地わたる

【評】受験生が勉強に飽きた深夜、気分転換のためにシャドーボクシングをしているというのだ。ボクシング練習も受験勉強もかなり本格的、受験も合格しそうであると思う。

卒業を太平洋へ叫びけり　横浜市　岡　一夏

【評】ようやく卒業ができたという強い喜びを太平洋に向かって大声で叫ぶことで表現している。この卒業の学校は、高校ではないだろうか。

とりあへずネコちやんと呼ぶ子猫かな　宝塚市　広田　祝世

【評】子猫が家にもらわれてきた。いい名をつけてやりたいが、まだ決まらない。ネコちゃんと呼んでいるが、そこにも敬意はこもるようだ。

春の芝歩かす亀を持ち出して　川口市　高橋まさお

春めくや湯気うつすらと堆肥小屋　松戸市　早坂　哲夫

結衆に交じり葺替ボランティア　大垣市　大井　公夫

卒業や昇降口を振り返る　狭山市　小俣　友里

犬ふぐり竜馬の像の前のめり　京田辺市　加藤　草児

花粉症雨ふれば洟おさまりぬ　小金井市　平田　雅一

卒業のリハーサルより泣きにけり　さいたま市　与語幸之助

俳句あれこれ　佐藤文香（俳人）

逢って話して③

先月、吉祥寺の小さなギャラリーで「『書肆山田の本』展」が開催された。俳人の関悦史さんがぜひ行きたいというので、私も一緒に行くことにした。書肆山田は詩集を中心に句集なども刊行している出版社だ。もともと現代詩読者だった関さんは「りぶるどるしおる」シリーズを集めていただけあり、サン＝ジョン・ペルス『鳥』ほか目当ての本をたくさん買い込んだ。私も関さんオススメの詩人・江代充の『黒球』などを購入した。

関さんと私がはじめてちゃんと話したのは二〇〇九年の年末、若手俳人のアンソロジー『新撰21』（邑書林）の刊行記念イベントだった。十六歳の年の差はお互い気にせず、七年前からは一緒に同人誌をやっている。△百年前ダダ・未来派や青簾関悦史▽。関さんには俳句を含む文学、芸術について教わることばかりだ。代わりに私は同人誌の編集、そして一緒に出かける際の道案内を担当している。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭